



しだれぎくらの林陽寺

御開山 350 回忌大遠忌・報恩結制記念

当山の名木 「しだれ桜」 樹齢 200 年余



禪 曹洞宗 林陽寺

美濃新四国第 59 番札所

ぎふ七福神 布袋尊札所



〒501-3156

岐阜市岩田西 3-402

電話 058-243-1380

ホームページ 林陽寺 

由 緒

当山は、弘法大師の草創で、全国行脚途中、数年ここに留まったといわれている。岩田の羽場西遇に村社「八幡神社」(現 伊波乃西神社)がある。大師はその南に、堂宇を建立し、自ら薬師如来の尊像を作って本尊佛としその背後に曼荼羅を添えた。大師 23 歳の「延暦 15 年 (796)、伊波西乃僧院八幡の境林陽寺僧 空海書」とある。さらに、弘仁 5 年 (814) 大師 41 歳のとき、当寺に再来し、7 日間薬師如来の護摩を修したと伝えられている。

その後、当寺は春日明神別当観音堂として祠られ、明神を今の鍋坂に移すと同時に、観音堂を北山鶴飼屋に移した。しかし、久しく無住となり、荒廃はなはだしく尊像も雨露にさらされた。寛文 5 年 (1665)、宜公和尚が、茲にきて大師の霊場が荒廃しているのを嘆き霊地を選定して一寺を再建し、旧寺号に復興、八幡山林陽寺と称し、松本全久院 (松本城主 松平丹波守菩提寺) 13 世了然玄超禅師開山第 1 世に据え、曹洞宗寺院となった。

その後、慶応元年 (1865) 飛騨丹生川正宗寺より天洲薩道和尚が入寺し、岩水姓となり、法灯連綿として現住 12 世 (前 9 世を加えて 21 世) に至っている。

なお、当寺の本堂は、明治 24 年 (1891) 10 月濃尾大震災によって倒壊。大正 9 年 (1920) 村内の御懇志によって再興。昭和 59 年 (1984) 現住の晋山記念として本堂屋根葺替等の大修理が行われ、翌年 11 月晋山式が行われた。庫裡は、平成 3 年 (1992) に再興、大広間の格天井に第 11 世玄峰和尚 (日本画家) の絵が 160 枚収められている。昭和 55 年 (1980) 盆月、円空仏 3 体が発見され新たな寺寶とされた。平成 26 年弘法堂が新築されほぼ整備が完了した。

御開山 350 回忌を間近に控えた令和元年 11 月 24 日。機熟したこの日、大遠忌と併せて結制 (十二世再会) を厳修し、感謝報恩の誠を捧げることにした。

お寺を身近に 林陽寺の活動においでください。

坐禅

第 2 日曜日

8 時～9 時



ヨガ

第 2 土曜日

9 時～10 時



写経

第 4 土曜日

10 時～11 時 30 分



当山歴住一覧（首座）

（遷化年）

首 座 名	年号	年	月	日	西暦	
初住監窓宜公首座	延寶	3	6	20	1675	寛文5年3月鶴飼屋観音堂に入寺。大師の霊場の荒廃を嘆き、一寺を復して旧寺号を復して林陽寺と称し、弘法大師を開基とし師父了然禪師を招き開山第一世とした。
二住洞水超公首座	元禄	15	6	10	1702	
三住春澤性温首座	寶永	4	8	12	1707	
四住翠巖義諄首座	享保	10	5	20	1725	
五住地雷禪祥首座	元文	3	5	16	1738	
六住悟峯意哲首座		不詳				
七住絶峯智岸首座	明和	元	8	14	1764	
八住契天元壽首座	天明	2	8	12	1782	
九住芝山仙靈首座	寛政	5	10	7	1793	

（首座位が九代続いている、この中には極めて古い亡僧位牌もある。寺の世代には入っていない。江戸時代の身分制と宗門の統制、すなわち瑞世をしなければ黒衣の僧という時代に大変苦勞をして林陽寺を守ってきた人たちである。他にも亡僧位牌や墓もあるため顕彰しなければならない方もあるだろうと思われる。）

禪 師 名	享年	年号	年	月	日	西暦
當寺開山了然玄超大和尚禪師	68	延寶	4	11	21	1676
傳法開山瑞岡珍牛大和尚禪師	80	文政	5	4	10	1822

二世中興溫國豐住大和尚禪師		文政	10	6	28	1827
三世祥山瑞應大和尚禪師		天保	11	9	13	1840
四世瑞巖台橋大和尚禪師		弘化	2	6	24	1845
五世大圓靈鏡大和尚禪師		文政	11	7	13	1828
六世家山良翠大和尚禪師		弘化	3	8	20	1846
七世虎岳素玄大和尚禪師		明治	14	2	1	1881
八世再中興天洲薩道大和尚禪師	70	明治	29	4	1	1896
九世靈外玄道大和尚禪師		明治	10	9	10	1877
十世重興天海玄龍大和尚禪師	76	昭和	20	3	4	1945
十一世層雲玄峰大和尚禪師	88	平成	6	12	15	1994
十二世大雲龍峰						

各禪師の功績

當寺開山了然玄超大和尚禪師	慶長14年8月薩州鹿兒島浅山氏に生。元和6年全久院南針の嗣となり南宅と名付く。正保3年永平寺瑞世。同年美濃国天徳寺住持。慶安2年信州東岸寺、承應元年長國寺住持。萬治元年（1658）全久院13世として入院。同5年退院。寛文5年（1665）9月林陽寺を開き住す。同8年本庄村醫王寺、同12年可児郡大原村普賢寺に住す。延寶4年11月21日遷化68歳。法嗣天桂永澤。
傳法開山瑞岡珍牛大和尚禪師	肥後天草の人。寛保3年正月6日生。安永8年7月21日永平寺瑞世。寛政7年8月22日53歳にて全久院27世。享和元年7月26日退寺。林陽寺に滞留、傳法開山。同2年武儀郡下有知龍泰寺32世となる。文化14年尾州公懇請して万松寺入寺。文政5年4月10日80歳にて端座して寂。5月10日君命を以て国葬を行い、荼毘して慶雲軒（永平寺別院）に塔す。

二世中興溫國豊住大和尚禪師	寛政9年3月10日法地起立。享和元年瑞岡和尚を招待。
三世祥山瑞應大和尚禪師	入寺不明。文化4年3月退寺。
四世瑞巖台橋大和尚禪師	文化4年3月入寺。文政5年3月31日退寺。 恵那市高安寺（岐阜県164番）開山。
五世大圓靈鏡大和尚禪師	文政5年3月31日関村千手院衆寮より入寺。
六世家山良翠大和尚禪師	文政12年3月15日瑞巖寺萊洲嗣入寺。
七世虎岳素玄大和尚禪師	慶應元年9月退寺。
八世再中興天洲薩道大和尚禪師	文化9年3月大野郡丹生川村坊方、岩水家にて生。文政12年12月正宗寺にて得度。嘉永2年冬、下有知龍泰寺にて立身。嘉永5年永平寺安居。嘉永7年7月正宗寺住職（42歳）文久2年10月正宗寺退寺。肥田瀬曉堂寺を経て文久3年正月林陽寺住職（51歳）。伽藍の修繕に尽くす。明治19年説教師拝命。明治24年濃尾震災にて諸堂倒壊。自らの衣資を以て25年間口4間奥行4間半の仮本堂建立。老境心労にて29年4月1日70歳にて遷化。
九世靈外玄道大和尚禪師	文久3年4月得度。龍泰寺に安居。明治8年2月立身。明治10年9月10日西南戦争に従軍中現地で病死。（死亡診断書による）。徴兵制により名護屋（名古屋）鎮台歩兵第六連隊第三大団四中队に属し、鎮台（明治21年廃止、師団に改組）時代最大の戦争であった西南戦争に従軍。一等卒。姓は貝崎。大和尚を追送。
十世重興天海玄龍大和尚禪師	明治3年9月愛知県丹羽郡五日市場湯浅家にて生。明治9年大龍寺13世に就いて剃髪。明治15年3月得度。明治19年9月より23年4月龍泰寺44世に随身し、岐阜県専門支校にて学ぶ。明治20年冬龍泰寺立身。明治23年2月大龍寺玄洞和尚の弟子である天海玄龍を転師し嗣法す。その後全久院、龍枯寺、長興寺の老師に随身。明治28年10月永平寺瑞世。明治40年4月晋山。41年11月庫裏の改築竣工。大正10年4月本堂改築竣工。昭和2年10月本堂改築の功により管長表彰。昭和13年敷地を改造し総門を移転。昭和13年7月岐阜県宗務所第10教区教区長。昭和15年10月再度管長表彰。昭和16年1月三等教師補任。昭和20年3月20日76歳にて遷化。

十一世層雲玄峰大和尚禪師

明治40年3月愛知県丹羽郡五日市場湯浅家にて生。大正4年3月湯浅家3男を玄龍が弟子に迎え、大正11年3月春一を玄峰と改名得度。大正11年11月より昭和4年3月まで奉安殿安居。昭和2年大龍寺磯貝師の初会にて立身。昭和6年大阪泰平寺安居、同年大阪美術学校入学、昭和10年大雄山最乗寺13年まで特に大石観法老師に隨身、その後は彦根清涼寺石川素禪老師に隨身、昭和13年永平寺瑞世。、昭和15年より22年頃まで稲葉郡岩村役場書記、昭和20年住職、昭和23年3月晋山。法務と画業に専念。昭和24年頃より民生委員、保護司を歴任。正教師、住職40年表彰。昭和60年本堂修復、平成3年庫裏新築等諸堂を整備。庫裏新築の際には「だるま画」を300枚ほど揮毫。また、座敷の格天井には160枚の絵を揮毫し集大成とした。平成6年12月15日88歳にて遷化。玄峰和尚後援会の記録によれば日本全国に仏画、花鳥、山水等約3500本の軸装を残している。

師匠が彦根清涼寺時代に石川素禪老師より頂いた「笏」いつも大切にしていた。

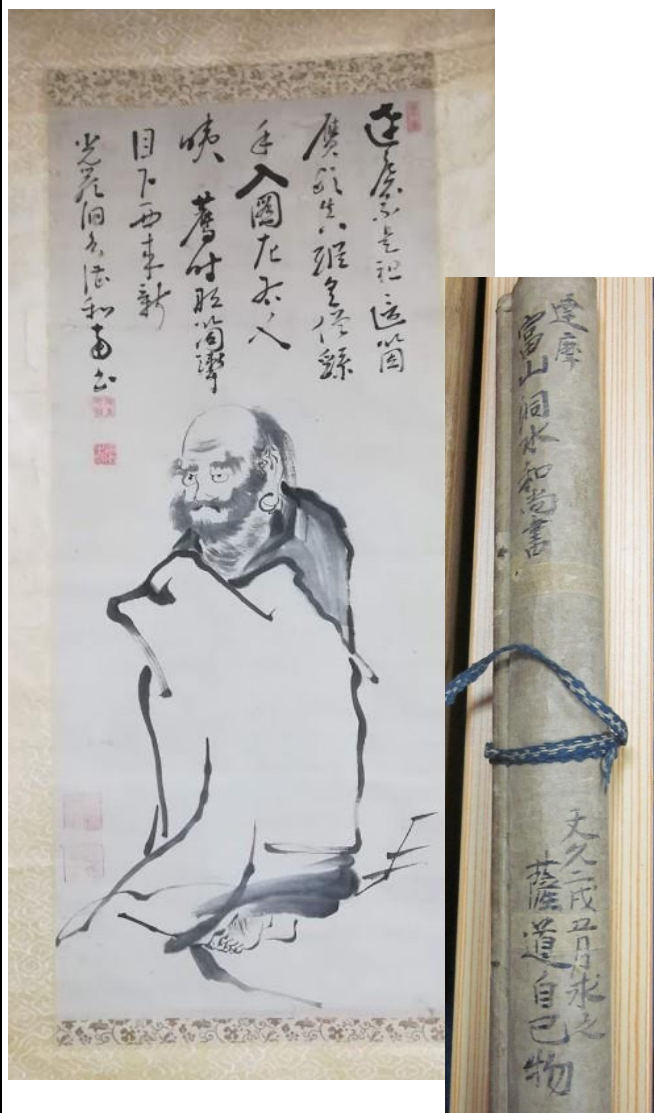
「万里一条鐵」〔景德伝燈録〕

すべての現象は刻々に変化しつつ、その実相（ありのままの姿）は少しも変わることなく過去・現在・未来の三世にわたって永遠に連なっているということ。転じて、一般的に、物事が絶えたり衰えたりすることなく続くことのたとえ。

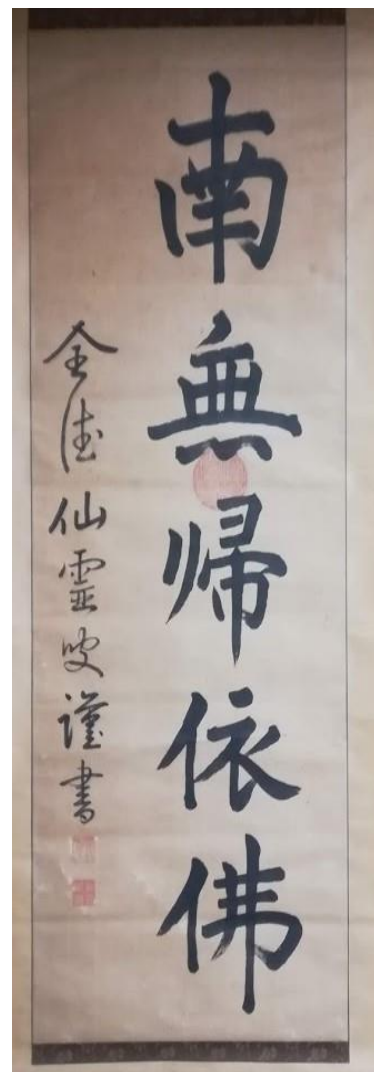
※正法眼蔵（1231 - 53）授記「授記の学道は、万里一条鉄なり」



二住 洞水超公首座の達磨図



九住 芝山仙靈首座の御真筆



当山名木 「ボタン」

100 年余。毎年 100 程の花を付けます。



当山の名木

「神の木といわれる 榊の木（ナギの木）」

樹齢一〇〇年余



傳法開山 瑞岡珍牛大和尚禪師の書画



禪師の当山に残した書画。「懶瓚（らいさん）の芋を焼く図」である。懶瓚は、中国唐の時代の僧で、明瓚（みんさん）と云うのが本名である。何事によらずなまぐさで懶（おこたり）ものだったから、「明瓚」と呼ばないで、「懶瓚」と呼ぶようになったと云うが、中国湖南省の南嶽の石窟に隠遁していた徳の高い名僧だった。

その高德を聞いた徳宗皇帝が迎え入れようと勅使を遣わしたところが、明瓚は、牛の糞を燃やして暖を採りながら、鼻水を顎まで垂らして芋を焼いて食べていて全く勅使の言葉に耳をかさない。勅使が見かねて「鼻水を拭いたらどうだね。」と云うと、明瓚は「お前さんの為に、なぜ鼻水を拭かねばならないんだ。」とかえした。

帰ってきた勅使からこの報告を聞いた皇帝は、「道人とはかくあるべきだ」と感心したと云う話が残っている。（中国の名僧博から）

当山の歴住は、この書画を大切にするようにと伝えられている。

当山の名木

「モクレン」
樹齢約100年余

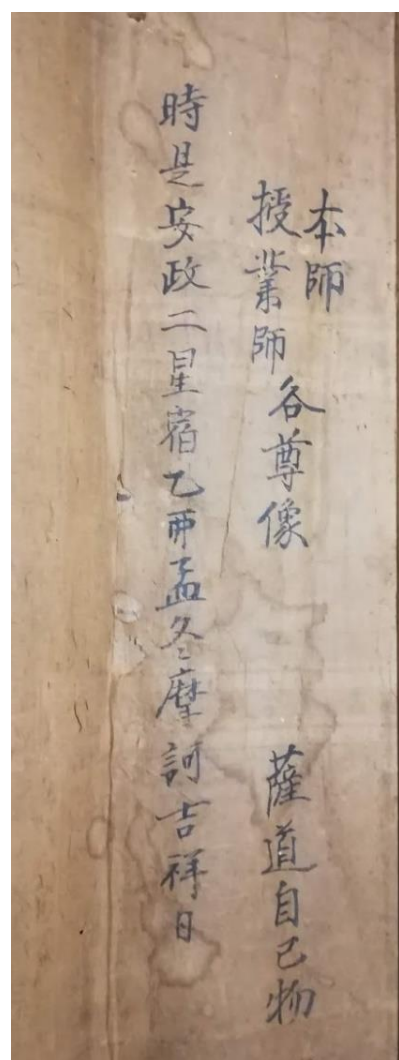
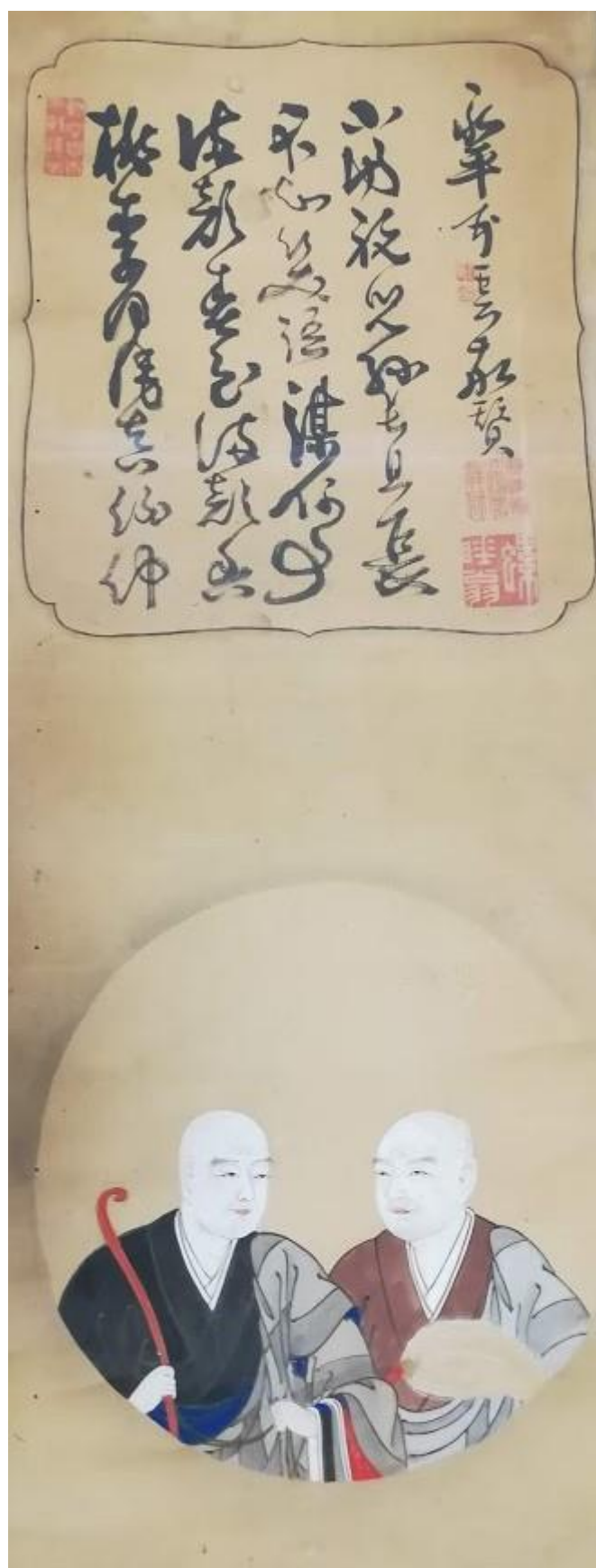


当山の名木

「まき」
樹齢約100年余



八世再中興天洲薩道大和尚禪師自己物



授業師 正宗寺 第十世 弘禪慈口大和尚
 本師 正宗寺 第十一世 道麟大跡大和尚
 贊は、永平寺第六十世 臥雲童龍禪師貌下

十世重興天海玄龍大和尚円鏡



十一世層雲玄峰大和尚禪師が残した座敷天井画の一部（百六十枚）



師匠の自叙伝が見つかりましたので写真を挿入して記録。

お山の思い出 あれこれ

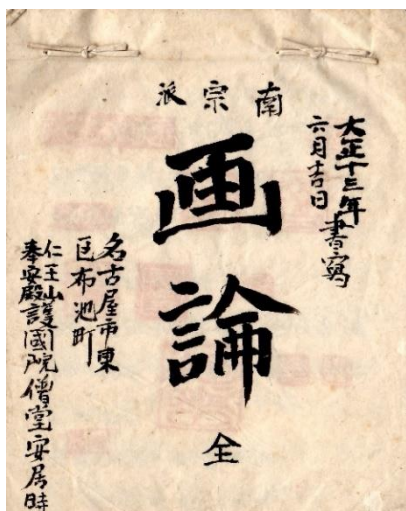
林陽寺東堂 岩水玄峰

(昭和 61 年 10 月 年 4 回発行の大雄より)

私は明治 40 年生れで愛知県一宮市の出身です。僧堂の安居歴は、大正 11 年 9 月から昭和 4 年の 3 月までの 8 年間は、名古屋の奉安殿（現在の大本山永平寺名古屋別院）、次いで昭和 10 年の 4 月から 13 年の 4 月までの 3 年間は、大雄山最乗寺です。その後は石川素童禅師のお弟子の石川素禅老師（最乗寺単頭）について、彦根の清涼寺に安居いたしました。こうした長い安居が出来ましたのは師匠が健康に恵まれたということもあります。



昭和 2 年立身 21 歳



18 歳の時、唐の王維を学ぶ

奉安殿の安居中、私がはじめて随喜した葬儀は、南宋画家の中島半翠画伯の祖母でした。以前から絵画に関心を持っていましたから、これをきっかけに、のちには大阪の泰平寺に籍を置くかたわら、大阪美術学校に 2 年間学び（昭和 7 年 3 月修了）、苦学的生活もあって心斎橋の茶店で自分の作品を売ったことなどもありました。絵画の道を歩みはじめたのは 16 歳の頃からで、もう 60 年を越えました。翠山道人と号し、四条派に属し、今までに約 400 軸ほどの作品を残しました。また「曹洞宗報」のカッ

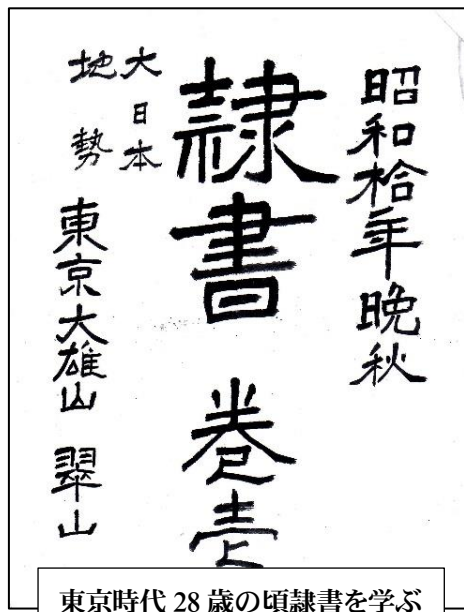
トを提供したこともありました。

最乗寺に上山したいききつは、岐阜県関市の龍泰寺住職五十嵐絶聖老師が、大本山総持寺監院職であられ、老師から当時の大堆山最乗寺東京出張所の院代赤星隆禅老師に話を通していただいたのです。当時の最乗寺は伊藤道海山主が 10 年 5 月に猊座に昇任され、10 月に大石観法老師が第 11 世の山主となりました。典座職が鈴木良純老師で特にこの配役を通じて御指導を頂きました。

この頃の大衆は約 20 位名で、御供式の開始は 11 時からでした。お山で一番つらかったことは、各寮にはほとんど火の気が無く、寒さが身にこたえたことです。古いアルバムの中に昭和 11 年 8 月 17 日から 21 日までの 5 日間行われた夏期禅学会の記念写真があでります。大石山主、石川単頭、鈴木典座、大西維那、岡本接客、梅津客



大阪美術学校時代の作品



行のお顔があり、参加者は 70 名、費用は食事宿泊共で 5 円でした。外部からの講師では、禅の生活社主の山田霊株老師が「仏教の日常生活への貢献」、柴山重一陸軍中将の「日本の国体と仏教に就いて」などのお話が記録に残っています。のちに本郷の東京出張所へ転役となりましたが、赤星院代の他に末光希仙師、それから学生が数人、お手伝いさん。近くに大雄山顧問弁護士の森岩大郎氏が住んでいました。

住職となったのは昭和 20 年で、岐阜市から電車で約 30 分ほどの林陽寺です。のちに名古屋の覚王山で私の伯母の葬儀があつて参りました時、岐阜の河田屋菓子店主人の紹介で、当時道了アメを販売しておられた江崎玄了氏（五星閣名古道了院院主）と面識を得、その御縁からずっと五星閣の毎月 10 日の例祭や、10 月 10 日の大祭には欠かさず随喜いたしております。

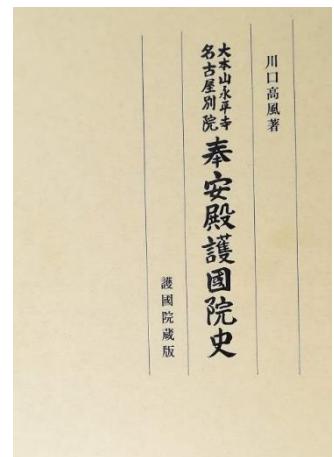
そして昭和 59 年の暮れには、本堂の改築工事も終り、弟子の龍峰に住職をゆずりました。

なおこの寺八幡山林陽寺は、真言宗の開祖弘法大師（空海）23 歳の時の開創で、江戸時代の初期には信州松本の全久院了然玄超を招いて開山第一世とし曹洞宗寺院となりました。私は永年にわたって三面大黒天を念持仏として祀っておりますが、ますます健康にも恵まれ、元気に 80 歳を迎えたところです。

（岐阜市岩田西三ノ四〇二）

（追記）

令和元年 5 月 31 日に愛知学院名誉教授である川口高風著述による「大本山永平寺奉安殿護國院史」が、別院法堂新築記念として監院井上義臣老師のもとで進められ刊行されました。川口先生の資料収集にあたり、たまたま多くの写真や記載した記録が目に留まり、沢山採り入れられ貴重な資料であったと感謝されました。師匠が残した修行時代の写真が役に立つとは思ひもよりませんでした。監院老師の言葉によれば「名古屋は大空襲ですべてが灰塵と化してしまい殆どなくなってしまった」とのこと。それにしても当時 18 歳頃の修行僧がよくも高価な写真と記録を残したものである。あまりのにも見習うことの多い先師であったが、時すでに遅しである。



たまたま機熟して、御寺院、護持会の皆様方のご加担ご援助の元に 350 回大遠忌法要並びに報恩結制を厳修することが出来ましたこと感謝申し上げます。「相承」することの難しさを常に感じながら日々精進してまいりました。歴代の住職様方の中にも、お弟子様に先立たれ悲嘆に涙した方もおられますが、何はともあれ 350 年の法灯が連綿として続いてまいりましたことに感謝報恩の誠を捧げ、檀信徒の皆様方と共に未来への道を進もうと思います。わが弟子峰雪もその一齣を荷ってくれると思います。まず、その一区切りとして 350 回大遠忌法要が無時円成したことに喜びを感じ、明日への糧にしたいと思います。

ありがとうございました。

十二世大雲龍峰（令和元年 11 月吉祥日）

